

FDネットワークを評価する

—FDネットワーク“つばさ”の一年を振り返って—

杉原 真晃

(高等教育研究企画センター)

はじめに

大学設置基準の改訂により、平成20年度、ファカルティ・ディベロップメント(以下、FD)が義務化された。大学だけでなく、短期大学(以下、「短大」)、高等専門学校(以下、「高専」)もその範疇に入る(以下、大学、短大、高専を総称して、「大学等」)。中央教育審議会は、平成20年4月の答申『教育振興基本計画について——「教育立国」の実現に向けて——』において、「各大学等における教育改善の取組を推進するため、教員の教育力の向上のための拠点形成とネットワーク化を推進するなど、個別の大学等の枠を超えた質保証の体制や基盤の強化を支援する」と述べ、続く2008年12月の答申『学士課程教育の構築に向けて』において、「学士の質の保証を図るために必要なのは、第一に、大学間の健全な競争環境の中で、各大学が自主的な改革を進めることである。第二に、大学による自律的な知的共同体を形成・強化し、大学間の連携・協同や大学団体等の育成を進めることである。」「単独の大学の取組のみならず、拠点的なFDセンター等を中心とする大学間連携によるFD・SD活動や、関係機関や専門家のネットワーク化の取組を促進する。教育業績の評価に関する有効な実践や、大学院における優れたプレFD活動に対しても支援する。」と述べ、競争と同時に、連携・協同によるFDとそのための拠点校の設置を推進させる方針を見せている。それは、平成20年度より「戦略的大学連携支援事業」が開始されたことから明らかである。

このような動向にともない、FDをターゲットにした大学間連携組織が全国で立ち上がった。本稿では、いち早くFDネットワークを立ち上げ、その実

績を積んできた山形大学での実践を評価しようと思う。それにより、今後のFDネットワークの発展、およびわが国の大学教育の発展につながる知見を提供できれば幸いである。

本稿で対象とするのは、平成19年3月に立ち上げられた「FDネットワーク“つばさ”」(以下、「“つばさ”」)である。その特徴は、全国のFDネットワークの多くが「連携」の契約を結んだ後、活動内容を検討するのに対し、既に、“つばさ”は、山形大学が長年蓄積してきた教養教育におけるFDのノウハウ、およびそれをもとに平成16年度に結成された山形県内6大学・短大による「地域ネットワークFD“樹氷”」(以下、「“樹氷”」)における連携FDのノウハウをもって、連携事業の目的、内容等が明確な状態で契約を結んだ点である。このような「即戦力」を持つFDネットワークにより、各参加校がすぐに自校での実践に入ることができるのである。

1. FDネットワーク“つばさ”の概要

“つばさ”は、FDをターゲットにした東日本地域(北海道、東北、関東)における大学等間連携組織である。その目的は、連携する大学・短大・高専の協同的FDによる、参加校の教育力の向上、魅力ある教育の開発である。山形県という地域性を帯びた“樹氷”から一歩進め、より広域における連携を行っている。その特徴は、次のようなものである。①受験生確保が競合しない離れた大学間で協調できる。②大規模なネットワークによって、共有できる教育資源を増やすことができる。③専門性が合致する大学間でFDを発展させることができる。

“つばさ”は、平成20年3月28日に結成式が

行われ、平成20年度より本格的な活動を行ってきた。加盟校数は平成21年1月末日現在、36となっている。

(<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/tsubasa/>)

2. “つばさ”の事業

主な事業内容は、次のとおりである。

- ・学生による授業評価（統一フォーマットによる授業評価アンケート）
- ・公開授業と検討会
- ・FD合宿セミナー
- ・FDワークショップ
- ・個別支援型FD（授業支援クリニック）
- ・Web FD
- ・FDシンポジウム
- ・学生FD会議（学生モニター制度）
- ・FD合同研修会（FD協議会）
- ・FDに関する講師派遣
- ・“つばさ”ホームページの作成、公開
- ・“つばさ”報告書の作成、配布

これらの事業は、山形大学教養教育のFDにおける相互研鑽（同僚性）の原則と、FDを長年蓄積してcomingることによる専門的知識・技能（専門性）との連関をもとに進められている。“つばさ”の事業の特徴は、これらの多様な取組を“つばさ”加盟校それぞれの事情に応じて柔軟に使い分けることができることである。それは6学部という多様な学問領域とそれぞれの学問領域での多様な授業スタイルにおけるFDを展開してきた山形大学の教養教育FDと、それをもとに統合型から分散型へと展開してきた“樹氷”のネットワーク型FDが持つ蓄積があるがゆえに保障されたものといえる。

学生による授業評価は、希望する大学等により山形大学教養教育で使用しているアンケートのフォーマットを共有し、評価結果を公開することで、大学等ごとの特徴がわかるようにしている。アンケート用紙の印刷、集計等、スケールメリットを活かし、かかる経費を削減することに成功している。もちろん、既に独自の授業評価アンケートを実施している大学等は、自前のアンケートを使用することを選択

される場合も多い。あくまでも自由意志によるものである。統一フォーマットによる授業評価アンケートでは、参加校8校、24万7000枚が活用され、コストダウンに役立つとともに、多くのデータが公開され、データの透明化・共有化が促進された。結果の透明化・共有化が重要であることを考えると、8校が同様のフォーマットでデータを共有し合えることは大きな成果といえよう。

公開授業と検討会は、授業者が自分の授業を公開し、他教員がそれを参観し、授業後、授業、カリキュラム、大学制度等、さまざまな論点について検討し合う。今年度は、“つばさ”参加校内で合計5回開催され、他大学からの参加も多く見られた。

FD合宿セミナーは、山形大学蔵王山寮にて1泊2日で集中的に研修を行うものである。シラバス作成や授業改善についての議論をグループワーク方式で行う。今年度は8月4～5日（第1チーム）と5～6日（第2チーム）の2回実施した。第2チーム（5～6日）においては、山形大学高等教育研究企画センター客員教員の佐藤龍子氏および大島武氏に講師を依頼し、授業実践・授業改善に焦点化したワークショップを実施していただいた。FD合宿セミナーには、40大学（104名）が参加し、そのうち“つばさ”加盟校からは11校（17名）の参加があった。

FDワークショップは、FD合宿セミナー終了の翌日、山形大学キャンパスにおいて、午前中には「観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造」というテーマで立命館大学教授の沖裕貴氏からご講演をいただいた。午後からは、3つの分科会に分かれ、それぞれ最新の教育課題についてラウンドテーブルを実施した。FDワークショップには、41大学（108名）が参加し、うち“つばさ”加盟校からは10校（11名）の参加があった。

FDに関する講師派遣では、“つばさ”加盟校10校に伺い、FDの講演やワークショップを実施した。平成20年度以前にすでに7校に伺っているため、現在で“つばさ”加盟校の約半数の大学等に伺っていることになる。

FDシンポジウムでは、岡山大学教育開発センター教授の橋本勝氏から、「学生参画型の教育改善：挑

戦から定着へ」というテーマでお話をいただいた。そして学生FD会議では、加盟校からそれぞれ1~5名の学生が集まり、「学生の連携による大学の改善」をテーマに、意見交流を行った。FDシンポジウムおよび学生FD会議には、37校90名(教職員58名、学生32名)、うち、つばさ加盟校からは22校68名(教職員38名、学生30名)の参加があった。

その他、紹介していない事業について、そして、それぞれの事業の詳細は、“つばさ”ホームページおよび『“つばさ”FD研究年報』をぜひ参照されたい。

3. “つばさ”の事業の評価

山形大学では、FD事業に際し、必ず事後アンケートを実施している。同様に、“つばさ”独自の事業についても事後アンケートを実施している。以下では、それらの事後アンケートをもとに、“つばさ”の主な事業について、その成果を分析する。

3-1. 公開授業と検討会

公開授業と検討会の事後アンケートには、次のような設問項目がある。

設問1 今回の授業の感想を自由に記述してください。

設問2 今回の授業を公開・参観して、御自身の授業をどのように振り返られましたか。何でも、自由に記述してください。

設問3 公開授業・検討会はいかがでしたか。何でも、自由に記述してください。

以下に、アンケート結果を記す。

●武道の授業

設問1について

- ・武道を取り入れていることに感心しています(学生が集中し手裏剣、吹き矢、弓には工夫して楽しんでやっていることに)。学生の反応を見て、その都度個別に説明されていることで学生の楽しさが伝わってくるように思います。

設問2について

- ・学生の集中力をどのように高めるかが大事であること、工学系の科目にも取り入れる工夫をしたい

と思っています。

設問3について

- ・これまでの学校(高専)では見られない授業を見せていただきました。今後、機会がありましたなら参加しますので、ご連絡ください。

●英語の授業

設問1について

- ・尻上がりに盛り上がっていった印象でした。一番驚いたことは受講している学生の態度が良かった(授業に集中していた)ことです。最初に席順を指定した(知り合い同士の組み合わせにならないように?)工夫は適度な緊張が保てた要因だと思います。これは大いに参考にしたい。
- ・とてもきびきびとしたテンポで次から次へと進んでいた。パートナー同士が、ためらわずに会話したには驚きました。言語材料がPower Pointで提示されるので集中できる。ノートを取らないので先生の説明に集中できるのは素晴らしい。

設問2について

- ・ヒアリングテープを10回も繰り返し、さらにその都度「まだ聞きたい人は?」と確認しながら進める(親切だと学生が感じるであろう)配慮は参考にしたいと思いました。
- ・どうしても黒板に文字を書く(ノートに写す)ことと、話しを聞くことと、考えることがごちゃ混ぜになり、ポイントがぼやけてしまう。

設問3について

- ・とても良い企画だと思います。有意義でした。機会があれば又参加したいと思います。
- ・とてもリラックスした雰囲気の中で、緊張感のある授業でした。自分が大学生の頃の英語とは全く異なり、英会話学校での日本人受講生という感じでした。学生同士わいわいと相談しながら取り組む姿は微笑ましかったです。

先生の指示に従って学生が活動している授業を大学で見たのは初めてです。ありがとうございました。

●教養教育科目(学際・総合領域)の授業

設問1について

・「必勝法」という科目のネーミングが了解困難でしたが、「教養」ということを中心に組み立てられた教育学の授業なのだというふうに理解しました。

学生に与える情報の種類、質、量といったことについて、かなりていねいに準備をされている感じが感じられました。時間がなかったせいか、講義部分の進行はレジュメ内容の重さのわりにはやや不釣合いな駆け足であったように思います。しかし、仮に講義部分の理解が完全でなくても、教育やコミュニケーションといった、学生が自分の体験からある程度語ることのできるテーマを含んだディスカッションの設定に救われているということはありそうです。

遅刻してきた学生に目ざとく気づいて声をかけたりする、学生へのかかわりのていねいさに感銘を受けました。

設問2について

・結論より過程に教育の目標を置くようなディスカッション重視の授業スタイルは、私が相手にしている学生と私の担当している専門分野ではなかなか適用が困難であると思いました。その分野について理解したり語ったりするために学生に必要な基本的な知識や経験の蓄積が十分でないことと、総合大学の教養教育と比べて資格養成の短期大学の学生の志向性がかなり均質であることから、異なる視点に触れるとか、議論が深まるといった展開になりにくい、少なくとも学生たちに記録を書かせるとそのような展開が見えてこないのです。

一方、ワークシート課題によるフィードバックは、学生の授業へのコミットメントを高めるという点で有効であることは、以前の経験からわかってはいました。しかし、私の力不足もあるのでしょうか、学生の書くものが相当につたない内容や表現ばかりで、全体に紹介したいようなよいものがなかなか得られないことが続き、手ごたえが軽いわりに手間がかかるということで、やめてしまった経緯がありました。授業に関連して何かを書かせ、それを基にフィードバックをするという授業のシステムの、学生とのコミュニケーションのチャンネルとしての重要性を、今回の授業を拝見して再認識しました。課題の設定などの点でかなりの工夫がいるとは思いますが、ど

のように取り入れられるか、もう少し考えてみようと思います。

ある程度高度な情報を素材として提供して、ディスカッションという調理作業は学生に任せるといって、学生への信頼を基盤とした授業の構成は、学生に与える情報をどのくらい下ごしらえするか、ということによってその成否がかなり左右されると思います。参観させていただいた授業では、下ごしらえはほとんどしていない印象を受けました。私が短大生を相手に授業を担当すれば、下ごしらえだけで授業が終わってしまいそうな感じです。このあたりのバランスというのは、こういう授業デザインで試行錯誤をしながら徐々に探り当てていくものなかもしれません。いずれにしても、学生がその時点で持っているものとのマッチングが一番問題になるのだと思います。その意味で、国立総合大学と田舎短大との学生の質の違いということも、思わざるを得ませんでした。

設問3について

・懇親会は、小ぢんまりと卓を囲む形だったので、非常に率直な意見交換になっていたように思います。ただ、後半で出ていたやや生臭い話題などでは、刺激的ではありましたが、退屈をすることもまったくありませんでしたが、こんな内輪の話題の中に自分がいてよいのだろうかというような居心地の悪さを感じていました。

以上、アンケート結果を記した。

“つばさ”加盟校の参加者からは、公開した授業から授業改善のヒントを得たこと、授業におけるポイントへの気づき、公開授業と検討会という手法の有効性等について、高く評価されていることがわかった。他教員、他大学の授業を見ることは、得てして「学生が違う」「自分の授業とは内容が違う」からといって「意味がない」と考えてしまうことが少なくない。しかし、公開授業と検討会の醍醐味は、事後アンケートに見られたように、「違う」ものを見て、そこから自らの文脈に引きつけて考える、自らの授業を省察することである。さらに言えば、「違う」からこそ気づくもの、発見するものもあるはずである。

“つばさ”における公開授業・検討会では、これらの点を重要視している。

3-2. FD合宿セミナー

FD合宿セミナーは第1チーム(8月4~5日)と第2チーム(5~6日)とではプログラムが異なった。事後アンケートもそれにともない、設問3の内容が異なっている。以下、各設問項目およびその結果を記す。

設問1 このセミナーには、積極的に参加しましたか。

とても積極的(3名)、やや積極的(8名)、
なんとなく(3名)、やや消極的(1名)、
とても消極的(1名)

設問2 セミナーが終了した現在、参加して良かったと思っていますか。

とても良かった(6名)、良かった(7名)、
普通(3名)、悪かった(0名)、
とても悪かった(0名)

設問3 今回のセミナーにおける次の各項目について、個人的な収穫度(意欲、理解、応用など)を5段階で評価し、○で困ってください。

(5: 良い⇔1: 悪い。5段階評価)

第1チーム(8月4~5日)

(1) 教育全般

5(1名)、4(3名)、3(3名)、2(0名)、
1(0名)

(2) 山形大学に対する主体的な参画意識

5(2名)、4(0名)、3(4名)、2(0名)、
1(0名)、無回答(1名)

(3) グループ学習形式による学生主体型授業

5(1名)、4(5名)、3(0名)、2(1名)、
1(0名)

(4) シラバスの書き方

5(1名)、4(3名)、3(2名)、2(1名)、
1(0名)

(5) プログラムI 大学へのニーズと課題

5(0名)、4(4名)、3(2名)、2(0名)、
1(0名)、無回答(1名)

(6) プログラムII 理想の大学をつくる

5(1名)、4(4名)、3(0名)、2(0名)、
1(0名)、無回答(2名)

(7) プログラムIII 授業名と目標、内容の作成

5(2名)、4(3名)、3(1名)、2(0名)、
1(0名)、無回答(1名)

(8) プログラムIV シラバスの完成

5(1名)、4(3名)、3(2名)、2(0名)、
1(0名)、無回答(1名)

(9) 参加者の相互交流

5(3名)、4(3名)、3(1名)、2(0名)、
1(0名)

第2チーム(5~6日)

(1) 授業改善全般

5(3名)、4(5名)、3(1名)、2(0名)、
1(0名)

(2) 学生を中心とする教育・授業の発展

5(1名)、4(3名)、3(4名)、2(0名)、
1(0名)、無回答(1名)

(3) グループ学習形式による学生主体型授業の体験

5(1名)、4(4名)、3(3名)、2(0名)、
1(0名)、無回答(1名)

(4) 所属大学に対する主体的な参画意識

5(2名)、4(3名)、3(4名)、2(0名)、
1(0名)

(5) プログラムI 自分を知る、自分を語る、他人(同僚・学生)を知る…

5(2名)、4(4名)、3(2名)、2(0名)、
1(1名)

(6) プログラムII コーチングとFDと

5(1名)、4(3名)、3(3名)、2(0名)、
1(2名)

(7) プログラムIII こんなときどうする?—参加型授業を目指して—

5(0名)、4(5名)、3(2名)、2(2名)、
1(0名)

(8) プログラムIV 授業力の向上

—わかりやすい授業を実現するために—
5(8名)、4(1名)、3(0名)、2(0名)、

1 (0名)

- (9) プログラムV 研修のふりかえりとまとめ
5 (6名), 4 (2名), 3 (1名), 2 (0名),
1 (0名)

- (10) 参加者の相互交流
5 (4名), 4 (3名), 3 (2名), 2 (0名),
1 (0名)

設問4 今回のセミナーを5段階で評価し、○で囲んでください。

(5: 良い⇔1: 悪い。5段階評価)

- (1) プログラムの内容の選択はいかがでしたか。
5 (3名), 4 (5名), 3 (6名), 2 (1名),
1 (0名), 無回答 (1名)
- (2) 内容に対する時間配分はいかがでしたか。
5 (2名), 4 (3名), 3 (8名), 2 (3名),
1 (0名)
- (3) 内容の難易はどうでしたか。
(5: 難しい⇔1: 簡単。5段階評価)
5 (4名), 4 (3名), 3 (6名), 2 (2名),
1 (0名), 無回答 (1名)
- (4) グループ学習による体験型のFD合宿セミナーの教育効果はどうでしたか。
(5: 良い⇔1: 悪い。5段階評価)
5 (6名), 4 (6名), 3 (3名), 2 (1名),
1 (0名)
- (5) このセミナーで示された学生主体型授業を、あなたの授業に取り入れようと思いますか。
5 (4名), 4 (6名), 3 (5名), 2 (0名),
1 (1名)
- (6) このセミナーの成果を、これからのあなたの教育活動に活かそうと思いますか。
5 (8名), 4 (6名), 3 (2名), 2 (0名),
1 (0名)
- (7) 今回のセミナー会場として蔵王山寮を利用したことについては、いかがでしたか。
5 (4名), 4 (6名), 3 (5名), 2 (0名),
1 (1名)
- (8) 今回のセミナーの開催時期はいかがでしたか。
5 (4名), 4 (6名), 3 (4名), 2 (2名),
1 (0名)

- (9) 今回のセミナーの企画・運営を総合的に評価してください。

5 (5名), 4 (5名), 3 (5名), 2 (1名),
1 (0名)

- (10) 今回のDR陣を総合的に評価してください。
5 (6名), 4 (6名), 3 (4名), 2 (0名),
1 (0名)

- (11) 今回のセミナー全体を総合的に評価してください。

5 (5名), 4 (8名), 3 (3名), 2 (0名),
1 (0名)

設問5 このセミナーにおいて、良かったと思う点

- ・参加者の意識が高かったので、たくさん刺激を受けられました。
- ・他大学の教員との交流が図れたこと。自分の疑問に思っていることや、考えなどを他大学の教員に質問したりしながら情報を取り入れることが出来た。
- ・専門外の先生方と話ができた良かった。
- ・他大学の教員との交流。集中して討議ができ、良い経験が出来た。
- ・他大学の先生との交流が良かった。
- ・他大学と相互交流が出来たこと。
- ・他大学の先生方との交流がはかれたこと。FDの視点で考えることを実感できたこと。自分自身の授業を再考できたこと。
- ・グループ形式で他大学のいろいろな先生方の意見を聞いたこと。周りの環境は最高であった。自然が多く、日常業務から完全にはなれて、合宿(FD)に専念できたこと。楽しいと思えたこと。
- ・2日目のセミナーは大変よかった。勉強になりました。
- ・合宿形式で行うところ。参加者のコミュニケーションが多いところ。
- ・多分野の先生方と交流し、楽しく興味深い話を聞いたこと。
- ・FDに関する教員交流が行えた。
- ・わかりやすい授業の進め方は参考になった。

設問6 このセミナーにおいて、良くなかったと思う点(改善すべき点)

省略

設問7 このセミナーに参加して、これからの自分の授業並びに教育活動をどのように展開していこうと考えていますか。

- ・グループ学習の形は難しい教科を担当していますが、部分的に導入できるよう工夫して見るつもりです。教員間のコミュニケーションを活発化するために、今回の経験が生かせればと思います。
- ・双方向授業を取り入れるように考えています。
- ・グループワーク（演習）形式で、授業を展開する際の役割分担や流れなどを、この回のセミナーから学んだので、活用できるところ活用させていただきたい。
- ・これからじっくり考えます。
- ・グループ学習を取り組むことを考え中。
- ・是非、グループ学習も取り入れて見たいと思います。
- ・セミナーに参加に熱い思いがこみ上げている今、今までなかなかできなかったことに本気で取り組もうと思っています。
- ・学生と教員の双方向のやりとりができる授業ができるよう改善していきたい。評価方法、授業の流れを、ガイダンス（授業の最初）に明示したい。
- ・2日目のセミナーでのことは明日からも使いたい。2日目のセミナーは大学の教員全員に参加させたい。
- ・自分の授業よりも、FD担当者として、学内のFD体制、システムづくりに活かしていきたい。
- ・双方向授業をグループワーク、カードを使った授業を取り入れたい。
- ・得られた知識を生かしたい。

設問8 御自由に感想を書いてください。

省略

以上、アンケート結果を記した。参加者には概ね好評だったといえよう。特に、「このセミナーに参加して良かったと思いますか？」という設問においては、「とても良かった」と「良かった」を合わせて80%を超え、「悪かった」「とても悪かった」が0%であったことは驚きである。また、細項目においては、「教育全般」「所属大学に対する主体的な参画意識」「授業力の向上—わかりやすい授業を実現するた

めに—」「参加者の相互交流」等の評価が高かった。特に「参加者の相互交流」に対しては、自由記述にも教員同士の交流による知識、意識、悩みの共有と、他大学の教員、他の専門分野の教員との交流による刺激について高く評価する回答が多く見られた。「シラバス」あるいは「授業」を共に創り出していく仲間としての交流が持つ大きな意義がここからわかる。

3-3. FDワークショップ

FDワークショップの事後アンケートの結果を以下に記す。

設問1 所属部局

省略

設問2 氏名

省略

設問3 今回のワークショップに参加して満足されましたか

満足（9名）、まあ満足（3名）、少し不満がある（0名）、不満である（0名）、その他（0名）

設問4 基調講演に参加していかがでしたか

良かった（11名）、まあ良かった（1名）、少し不満がある（0名）、不満である（0名）、その他（0名）

設問5 ラウンドテーブルに参加していかがでしたか

良かった（8名）、まあ良かった（4名）、少し不満がある（0名）、不満である（0名）、その他（0名）

設問6 全体会に参加していかがでしたか

良かった（5名）、まあ良かった（5名）、少し不満がある（1名）、不満である（0名）、その他（0名）、無記入（1名）

設問7 次回もワークショップに参加しますか

参加したい（9名）、どちらとも言えない（3名）、参加しない（0名）

設問8 今回のワークショップについて良かったと思う点、印象に残った点をあげてください。

- ・グループディスカッションで現場の先生の生の声が聞けてよかったです。又、グループディスカッ

ションでの要約資料が全体会で配布され、作業の迅速さがすばらしいと思いました。

- ・基調講演が大変参考になりました。現在自己評価報告作成書作成アドミッションポリシーを作っているので大変参考になりました。
- ・DP や CP の具体的なことを聞いたこと。又、グループ定義ができ、共通の課題を整理出来た事。
- ・現在の学習目標→評価法のシビアな流れがよくわかりました。参考になる授業方法があった。

(著者注：「DP」とは、ディプロマ・ポリシー、「CP」とはカリキュラム・ポリシーのこと。)

- ・他大学の動向と本学の状況に同様の意識と悩みを感じました。
- ・基調講演は大変参考になりました。
- ・本学では、今年9月に第3者評価の実施調査を受けるが、タイムリー基準に基づくキーワードについて話があったり、(基調講演について)、分科1の山形短期大学の事例報告で「チームティーチング」についての報告があった。本学では、2009年度4月より「教養教育」科目内の非常勤科目を専任(専門外)複数名によるチーム授業の運営を検討しており、大変山形短期大学の話は参考になった。
- ・背景となる全体像と具体的な取組みのバランスが良かった。
- ・基調講演がとても参考になりました。今後の改革になくてはならない内容であり、できる範囲で取り組めるよう報告をしたいと思います。各大学が、各大学のFDを実践でき、つぎに繋がられるよう、大学に携わるものが元気に、活力でがんばりたいです。
- ・沖先生の基調講演の観点別教育目標のCPの話が非常に参考になった。

以上、アンケート結果を記した。

「今回のワークショップに参加して満足されましたか」に対して「満足」と「まあ満足」を合わせて100%になる。高い評価を得ていると言える。特に基調講演に対する評価が高く、大学教育に関する最新情報の獲得を目的としたFDワークショップがじ

ゆうぶんな成果をあげていることがわかる。また、ラウンドテーブルにおける参加者同士のディスカッションも有意義であることがわかる。基調講演はもちろんのことであるが、特に多様な人々が参加するラウンドテーブルにおいては、ディスカッションするテーマ次第で満足度は異なることが予想される。FDネットワークに参加する多様な大学等それぞれの課題に応じるために、それぞれのニーズを常に把握しておくことが求められるであろう。

3-4. FDシンポジウム(講演会)・学生FD会議

FDシンポジウム・学生FD会議には、“つばさ”加盟校以外の複数の大学等からも参加があった。しかし、“つばさ”加盟校にとっての成果に焦点をあてるため、ここでは“つばさ”加盟校のアンケート結果のみを扱う。

本シンポジウム・学生FD会議には、各大学等の教員、事務職員、学生が参加した。以下では、全体、あるいは、教員、事務職員、学生ごとに整理して記す。

<FDシンポジウム(講演会)>

設問1-(1) 満足度はどの程度ですか？

◆全体

大変満足している(25名)、少し満足している(23名)、あまり満足していない(1名)、まったく満足していない(0名)、回答なし(1名)、「大変満足している」と「少し満足している」の間(2名)

◆教員

大変満足している(10名)、少し満足している(4名)、あまり満足していない(0名)、まったく満足していない(0名)、回答なし(0名)、「大変満足している」と「少し満足している」の間(1名)

◆事務職員

大変満足している(5名)、少し満足している(3名)、あまり満足していない(1名)、まったく満足していない(0名)、回答なし(0名)

◆学生

大変満足している(10名)、少し満足している

(16名), あまり満足していない(0名), まったく満足していない(0名), 回答なし(1名), 「大変満足している」と「少し満足している」の間(1名)

設問1-(2) 参加された感想をお聞かせください。

省略

設問1-(3) 今後, どのようなテーマの講演をお望みでしょうか?

省略

<学生FD会議>

設問2-(1) 満足度はどの程度ですか?

◆全体

大変満足している(24名), 少し満足している(16名), あまり満足していない(5名), まったく満足していない(0名), 回答なし(3名), 「大変満足している」と「少し満足している」の間(3名)

◆教員

大変満足している(6名), 少し満足している(4名), あまり満足していない(2名), まったく満足していない(0名), 回答なし(1名), 「大変満足している」と「少し満足している」の間(2名), 「少し満足している」と「あまり満足していない」の間(1名)

◆事務職員

大変満足している(4名), 少し満足している(4名), あまり満足していない(0名), まったく満足していない(0名), 回答なし(1名), 「大変満足している」と「少し満足している」の間(1名), 「少し満足している」と「あまり満足していない」の間(1名)

◆学生

大変満足している(14名), 少し満足している(8名), あまり満足していない(3名), まったく満足していない(0名), 回答なし(1名), 「大変満足している」と「少し満足している」の間(2名), 「少し満足している」と「あまり満足していない」の間(1名)

設問2-(2) 参加された感想をお聞かせください。

省略

設問2-(3) 今後, どのようなテーマの講演をお望みでしょうか?

省略

以上, アンケート結果を記した。FD シンポジウム(講演会)も学生FD会議も「大変満足している」と「少し満足している」という回答がほとんどであり, 概ね好評だったといえる。特に, 学生FD会議に対する参加学生からの評価がかなり高かった。また, 上記では省略したが, 設問2-(2)では,

- ・多様なバックグラウンドをもった学生同士が交流すること自体が有意義。
- ・参加した学生がそれぞれの大学での核になる, きっかけになればよいと思うので継続的に学生を送り込むのが良いと思います。
- ・学生各自が, 大学を良くしたいという意志を持っていることがわかった。

というような感想が見られるなど, FDをテーマにした学生交流により, 学生が大学という自分たちが「生きる」場を自分たちの力で変えていくことができることへの気づきと能動的態度の形成が見られた。学生が他大学等の学生, 教員, 事務職員と交流する場を通して, 大学教育改善に興味を持ち, 今後積極的にかかわっていくことができる可能性が大いにありと考えられる。

4. 考察

以上, 分析してきたように, “つばさ”の事業は概して加盟校からの参加者にとって有意義なものとなった。特に, 多様な教員同士の交流, 授業実践の参観, 授業のノウハウや大学教育に関する最新情報の獲得, 熱意やヤル気の醸成・共有・創発等, 自校に戻った後のFDおよび授業改善活動を進めていくうえで大いに役立ったといえよう。

著者はFDネットワークが必要とされる目的には, ①同質志向, ②異質志向があることを指摘した(杉原, 2008)。同質志向とは, FDネットワークに期待する目的を情報・ノウハウの共有とその活用とするものであり, 直接的に自校のFDに役立つものを求

める志向性である。一方、異質志向とは、情報・ノウハウの共有が同質志向に留まらず、自学のFDにとってノウハウ・事情が異なるが故に教育改善が実質的・有効にすすむ、特色ある教育への気付きにつながる、新たなアイデアと実践が生まれる等の機能を持つことを求める志向性である。今回の分析で明らかとなった、授業実践の参観、授業のノウハウや大学教育に関する最新情報の獲得、熱意やヤル気の醸成・共有という“つばさ”の成果は、この同質志向に該当するであろう。

共有された情報・ノウハウを同質志向のもとで、FDの効率的な運用に活用する方法を、本稿では「知のエコロジー」と呼ぶ。また、共有された情報・ノウハウを同じく同質志向のもとで、FDがあまり進んでいない大学等において参照枠組みとして活用する方法を、本稿では「知のセーフティネット」と呼ぶ。FDネットワークの第一の意義は、この「知のエコロジー」「知のセーフティネット」であると言えるであろう。競争と連携を組み合わせた教育の質保証の展開とは、まさしく競争による切磋琢磨という光の部分を活かすために、過激な競争によるリソースの浪費と我々の徒労をなくし（知のエコロジー）、さらに競争から生じる知の占有、格差、支配、不安を解消する（知のセーフティネット）ことなのである。競争が自己目的化しない、「共存のための競争」であることが大切なのである。それが「公共性」である。“つばさ”はこの機能を果たしていると言える。

しかしながら一方で、“つばさ”の成果分析から伺えることは、異質志向も見られたということである。多様な教員同士の交流、熱意やヤル気の創発等がこのこれに該当するであろう。

共有された情報・ノウハウを異質志向のもとで、自校の特色ある教育への気付きやその創造の契機とする方法を、本稿では「知のイノベーション」と呼ぶ。同質志向がFDネットワークとしての「知の消費」であるならば、異質志向はFDネットワークとしての「知の生産」であるとも言える。本来、大学とは知を生み出す機関である。さらに、ニーズに対応するための知の生産だけでなく、ニーズを新たに作り出す創発的な生産をも行っているはずである。

我々は消費のための共有だけでなく、創発的な生産のための共有といった視点を失ってはならない。“つばさ”はその両者を兼ね備えたものとして出発したと言えるであろう。

おわりに

FDネットワークは、まだ黎明期である。本稿では“つばさ”を事例に、FDネットワークの特徴と意義を考察したが、FDネットワークの進む道は決して順風満帆ではない。多様なFDネットワークが発生し、それぞれが独自の特徴と意義を表出することが望まれるが、中には消滅していくものがないとは限らない。我々は、今後もこれらの動向を注視し、失ってはならないもの、新たに創り出す必要のあるものについて、継続的に検討を重ねていかなければならない。

引用・参考文献

- 中央教育審議会（答申）『教育振興基本計画について——「教育立国」の実現に向けて——』2008年4月。
- 中央教育審議会（答申）『学士課程教育の構築に向けて』2008年12月。
- 杉原真晃「FDネットワークに対する期待と課題——東日本地域の大学等へのFDの現状・ニーズ調査の分析——」『大学教育学会誌』, 30(2), 164～168頁, 2008年。